

新 おおさか KEYわーど 【第8回】

虫の音も浪花名物 コオロギのビルディングは物憂げ

今年は“虫の音”をあまり聞いていない。都心でも、路傍の草むらや路地に並べられた植木鉢の周辺から“虫の音”が漏れて秋の風情をかもしだしてくれるのだが、新型コロナウイルス感染症で外出を控えているためか、通日も静かで例年とは調子が違う気がする。

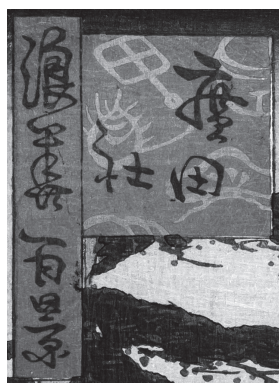
今年9月、大阪くらしの今昔館(北区天神橋筋)に、秋の虫に関して興味をひく掛け軸が展示されていた。小西秀麿が描いた《虫売り》(図1)である。縁日か何かの露店で、虫かごに入れた秋の虫を売っている図である。

秀麿は、日本美術院同人の北野恒富(1880～1947)の門下で、師匠ゆずりの美人画を得意とした。恒富は大阪を代表する画家

だが、明治43(1910)年の第4回文部省美術展覧会に入選したその出世作も、垣根にもたれて“虫の音”を聞いている若い娘を描いた作品だった。

秀麿の絵で面白いのが看板である。「むし」という平仮名に、大きな鈴の絵や馬具の轡(くわ)が描かれている。文字と絵をあわせると鈴虫、くつわ虫となる。

この趣向は、本連載で何回も取り上げてきた幕末の浮世絵「浪花百景」にもある。精細な画像による「浪花百景」の復刻版を今秋に刊行するが(橋爪節也編著『原寸復刻「浪花百景」集成』創元社)、アカエイの絵馬で知られる廣田神社(現・浪速区)を描いた百景の一図「廣田社」(表紙図版)も同じ仕掛けで“虫の音”と関係する。



(図2)「廣田社(浪花百景)」のタイトル部分 大阪市立図書館デジタルアーカイブより一部改変



(図1) 小西秀麿「虫売り美人図」部分 昭和初期(個人蔵)

画面の左上の短冊型に総タイトルが記され、正方形の色紙型に「廣田社」という題名が記される。この色紙型の地紋に描かれているのが、鈴、轡、松、玉(宝珠)である(図2)。お分かりと思うが、これも鈴虫、くつわ虫、松虫、玉虫を意味する。

絵には虫そのものの姿は描

かれていないし、聴覚で味わう“虫の音”を視覚化することは難しいが、縁台に座って名月を愛でる風流人たちは、涼やかに聞こえてくる“虫の音”も楽しんでいるのである。

画家と“虫の音”では、洋画家小出楯重(1887～1931)の随筆「蟋蟀の箱」も忘れられない。小出の実家は長堀橋筋の薬屋で、堺筋を挟んで現在の南郵便局の東側付近にあった。小出は少年時代を回想する。明治30年代だろう。

「私が小学校へ通っている時分だった。私の家のあった堺筋は、今こそ、上海位(くら)の騒々しさとなってしまったが、その頃はまだ大阪に電車さえもなかった時代」である。家の裏にも空き地があり、そこでたくさんのコオロギを捕まえる。それを、「厚紙で五階に仕切り、沢山の部屋を作り階段」をつけて、「あたかもビルディング」のように作ったボール箱の中に入れて遊んだ。

そして、箱は狭いので、稲荷さんを祀った庭の石垣に二、三十匹いたコオロギを放すのだが、一斉に鳴き出し、父親が飼っていた鈴虫の音が聞こえなくなってしまう。

「喧しゅうて寝られんやないか」と叱られてコオロギ退治を命じられた。「以来、蟋蟀の声を聴く度にその時の情なさを思い出し、そしてその頃の堺筋の情景を思い出す」と小出は語り、「あの蟋蟀の子孫は、まだ、裏の下水のあたりで鳴いているにちがいないと思う」と結んでいる(小出楯重「蟋蟀の箱」)。

私の育ったのも小出と同じ島之内だが、小学生のころ、何を思ったか父が鈴虫を飼いだした。秋になるといつも私は、鈴虫の鳴く声と、木炭が入れられた飼育ケースを思い出し、少し感傷的になる。

「浪花百景」は今から160年前、コオロギのボール箱のビルディングは120年前、父の鈴虫は50年前。“虫の音”は過ぎ去った過去の記憶をゆりおこす。

筆者プロフィール

橋爪 節也 はしづめ せつや

大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村兼葎堂一なにわ 知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ増殖するマンモス／モダン都市の現像―』(創元社)など。